琉球大学学術リポジトリ

「終了」を表す複合的な動詞について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2010-07-23 キーワード (Ja): 終了, 限界, 局面, 複合的な動詞 キーワード (En): end of the event, terminate, phase, compound verb 作成者: 玉城, あゆみ, Tamaki, Ayumi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/17607

琉球大学留学生センター紀要
留学生教育　第7号，2010

「終了」を表す複合的な動詞について

玉　城　あゆみ

要　旨

「しおわる」，「しおえる」，「しやむ」，「しあげる」，「しあがる」，「しきる」，「しつくす」，「しはてる」の８形式を何らかの「おわり」を表す形式であると仮定して，〈終了限界達成〉という観点からそれぞれの形式が表現する「おわり」のあり方を検討した。その結果，どの形式も前項要素にさしだされる運動（できごと）の終了限界達成をとらえており，その運動の「おわり」を表現するという点では共通している。しかしその一方で，前項要素にさしだされる運動を時間的な展開過程のあるものとしてとらえ，その終了限界達成を表現する形式と，前項要素にさしだされる運動の終了限界達成のあり方を表現する形式の２つに分けられることがわかった。

【キーワード】終了　限界　局面　複合的な動詞

1. はじめに

本稿で取り上げるのは「しおわる，しおえる，しやむ，しあげる，しあがる，しきる，しつくす，しはてる」の８形式で，「終了」や「終結」，「完遂」，「完了」などの意味があるとされている[1]。「終了」，「終結」，「完遂」，「完了」は異なる概念ではあるが，何らかの「おわり」をさしだすという点で共通していると仮定できる。８形式の後項要素は「している」ほど文法化しておらず，高橋（1985），工藤（1995），須田（2003）などでも語彙的な性格が強いことが指摘されている。山崎（1995），須田（2003）は本論で取り上げる８形式を表１のように分類している。

表１

	しおわる	しおえる	しやむ	しきる	しあがる	しあげる	しつくす
山崎	①アスペクト的な意味・用法だけを有する			②動作的な意味用法も有するが，アスペクト性が進んでいる	③動作性が一次的で，アスペクト性が二次的である		
須田	段階動詞[2]			動作の実現のし方，動作の様態を表わしているアクチオンスアルト			

本稿での大まかな分類は山崎（1995），須田（2003）と重なる。多くの先行研究では様々な観点からの意味特徴の指摘はあるものの，８形式のアスペクト的な意味だけに注目した細かい分析はそれほどされていない。本稿ではこれまでの結果をふまえつつ，〈終了限界達成〉という観点から８形式を分析し，動作が終了限界に達するときのそれぞれの形式が表現する「おわり」のあり方を検討した。

限界とは「言語的に表現された動作の，時間のなかでの展開におけるしきり」である（須田 2003：161）。本稿でいう〈終了限界達成〉とは，「そこにいたれば，動作の展開の過程がつきはて，それ以上展開することのできないような，動作の臨界点」（同上）である(3)。

用例はCD-ROM版「新潮文庫の100冊」，「大正の文豪」，インターネット図書館青空文庫を用いて収集した。

2. 対象とする形式の終了限界達成のあり方

対象とする８形式は，いずれも前項要素にさしだされる運動の終了限界達成を捉えていて，その運動の「おわり」を表現するという点では共通している。しかし，終了限界達成との関わり方から次の２つに分類することができる。

Ⅰ．運動を時間的な幅のあるものとして捉え，その終了限界達成を表現する形式：「しおわる」「しおえる」「しやむ」の３形式

Ⅱ．運動の終了限界達成のあり方を表現する形式：「しあげる」「しあがる」「しきる」「しつくす」「しはてる」の５形式

Ⅱに属する形式は程度の差はあるものの，後項要素となる動詞の語彙的な意味の影響を受けていて，むすびつく前項要素にも制限がある。そのさまざまな組み合わせが，終了限界達成のあり方にバリエーションをもたらしている。

2. 1. 運動を時間的な展開過程のあるものとして捉え，その終了限界達成を表現する形式

2. 1. 1. 「しおわる」「しおえる」

「しおえる」は形式的には「しおわる」と対立する他動詞だが，「しおわる」が他動詞としてはたらくこともあるため，本稿では「しおえる」と「しおわる」は同一に扱う。「しおわる」は前項要素となる動詞も幅ひろく(4)，８形式のなかで最も生産性が高い。また，「しおわる」の前項要素は意志性のある他動詞が多いといわれてお

り（山崎 1995：82），今回収集した用例も基本的に意志性のある他動詞であった。主に客体の状態や位置変化をひきおこす動詞であるが，内的限界をもたない言語活動や食物摂取行動を表わす動詞も少なくない。

「しおわる」「しおえる」の前項要素になるのは基本的に時間的な長さが必要な動作だが，時間的な長さのない動作も多回的なものであれば「しおわる」の形式をとることができる。(2)（3）のように主体や客体が複数の場合，動作の連続はあるひとつの動作の展開過程として捉えられており，「しおわる」はその一連の動作全体が終了限界に達することを表現している。(2）の例では１本１本の爪を切る動作が「左手の爪を切る」という大きな動作の始まりであり，途中であり，10本めの爪を切る動作が「左手の爪を切る」という動作の終了を表している。

(1) ビニールの袋から，大事そうにマッチをとりだし，使い終えると，またきっちりくるんで，輪ゴムでとめた。（砂の女）

(2) 左手の爪を切り終えた時，両手でそれを握ったまま，顔を伏せるようにし英子は忍び笑いし出した。（化石の森）

(3) 全員が突き終えると，老人の死体を埋めた。あらかじめ当番兵が掘っておいた穴に老人を投げこみ，土をかけ，足で踏みかためる。（湿原）

また，須田も指摘しているように，「しおわる」が使用されるテクスト内に「しはじめる」「しつづける」などのその他の局面を表わす動詞が使用されることがある[5]（2003：116）。

(4) ひどく疲れ横になって休みたいが，医務の診察を受けなければ横臥許可はやれぬと担当が言うので，仕方なく壁に背をあずけ，この日記をつけ始めた。つけ終った今，深夜である。（湿原）

(5) 要約すれば，令子はそのような話を喋りつづけ，喋り終えると私の腋の下に顔を埋めてきました。（錦繡）

このようなテクスト的な特徴はⅡの形式にはみられず，「しおわる」が前項要素にさしだされる出来事を時間的な幅のあるものとして捉えていること，「しはじめる」「しつづける」といった別の局面を前提としてもっていることを意味している[6]。(4)

の場合，「日記をつけ始めた」を「日記をつけた」に言いかえると，「日記をつけた」はひとまとまり的な動作を表すことになるため，コンテクストがくずれてしまう。

2. 1. 2. 「しやむ」

「しやむ」は生産性の低い形式で，自然現象や人の生理的なふるまいを表わす自動詞が前項要素となる。「しやむ」は内的限界をもたないこれらの運動の終了限界達成を表現し，同時に運動の時間的展開過程を捉えている。しかし，「しやむ」は，「やむ」の語彙的な意味「中止・中断」との関わりから，〈中止〉のニュアンスもうかがえる。

(6) 枝子はいかにも悲しそうな顔をした。窓の向うで，つくつく法師がしきりに鳴いていた。その時不意に，重苦しい轟音がとどろき，蝉の声が鳴きやんだ。（草の花）

(7) すると，寺西保男はしばらく間をおき，また忍び泣きをはじめるのであった。泣いている幼児に菓子をあたえると一時は泣きやむが，また泣きだす，あれと同じであった。（冬の旅）

「しおわる」「しおえる」には，他の局面を表現する形式が同一コンテクスト内で使用されることがあるという特徴があったが，(8) ～ (10) のように「しやむ」にも同様の例が見られる。

(8) 火を見て泣き出したのだが，なにを泣くのかと島村はいぶかりもしないで抱いていた。駒子は不意に泣きやむと顔を離して，「あら，そうだった，繭倉に映画があるのよ，今夜だわ。人がいっぱいはいってるのよ，あんた……。」（雪国）

(9) こしのすずがリリンリリンと，足をかわすごとになりつづけ，やがて，リッ，となりやんだのが，大石先生の家の縁先である。（二十四の瞳）

(10)「はああれか。あれはね私の妻子ですんだ。荊妻と豚児共ですよ」と云って高々と笑いかけたが，ふと笑いやんで，険しい眼で葉子をちらっと見た。（或る女）

先述したように，このテクスト的な特徴はⅡの動詞には見られず，このことから「しやむ」は「しおわる」「しおえる」と同一（またはよく似た）機能をもつ形式であると考えることができる。

2. 2. 運動の終了限界達成のあり方を表現する形式

2. 2. 1. 「しあげる」

山崎（1995：84）は，「しあげる」が表わすアスペクト的な意味を，「(完成品をともなう）作業活動の完了および行為の完了（＋同時に話者の満足感・達成感といったムード的意味)」と述べている。「しあげる」に付随するムード的な意味については「「完成・成功」したという意味」(渡辺・陳 1991：20)，「思うとおりの成功，完成」(陳 1992：6）といったプラスのニュアンスを捉えているものが多い。以上のような特徴をふまえて用例を見ていくと，〈結果〉，〈動作の完遂〉，〈それ以上進まない客体の変化結果の状態〉という３つのあり方で終了限界と関わっていることがうかがえた。

a. 〈結果〉の側面から終了限界と関わる場合

前項要素が主に生産活動を表わす動詞の場合，終了限界に達したときに生産活動の結果生じたものが存在する。生産活動を表す動詞は「しあげる」のかたちをとることで限界性が強調される。動作の結果としての生産物が完成した時，その動作が終了限界に達することを表現している。

(11)「地図を描くのはべつにかまわんよ。(中略)。ここはさして広い土地というわけではないが，冬場には君の知らんような危険な場所もいっぱいあるんだ。地図を描きあげるのは春まで待ちなさい」(世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド)

(12) 要次郎は生きていた。しかも半年に近い孤独と窮乏の中で，大黒天など二十余の像を彫りあげていた。(花埋み)

(13) 夫に死別してから友子は土蔵を利用して質屋を経営しながら遺児四人を立派に育てあげていた。(花埋み)

b. 〈動作の完遂〉という側面から終了限界と関わる場合

認識活動など，内的限界をもたない動詞が前項要素になる場合，「しあげる」はその動作がある範囲において完全に行われることを表現している。しかしその完全さは一義的なもののではなく，コンテクストの中で外側から範囲が指定されている。

(14)「その教授は頭骨を隅から隅まで調べあげて，結局十八年前に若い大尉が考え

たのと同じ結論～に達したの。（略）」（世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド）

(15) ～二十七年間の，たいして面白くも楽しくもなかった銀行員としての仕事を勤めあげたということでした。（錦繡）

(16) 私は四分の三ばかり読みあげた『赤と黒』を床に放り出し，虐殺をまぬがれた読書灯のスウィッチを切り，横を向いて背中を丸めるようにして眠りについた。（世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド）

前項要素のさしだす動作は内的限界をもっていないため，外側からしきりが与えられないかぎり動作は続いていく。「しあげる」の形式をとることで，与えられた範囲において残りなく行われた動作の終了限界達成を表わすようになる。

c. 〈それ以上進まない客体の変化結果状態〉という側面から終了限界と関わる場合

主体動作・客体変化動詞が前項要素になると，主体によるはたらきかけをそれ以上行う必要がないほど客体の変化結果状態が進んでいることを表わし，それ以上進めない段階への到達が終了限界達成となる。主体の動作によって客体の状態は変化するが，その変化は漸次的なもので，主体のはたらきかけの度合いによって結果状態の程度はことなる。

(17) 黄いろい衣もはれがましく，頭も青々と剃りあげています。（ビルマの竪琴）

(17′) ～蹴込みから飛び下りた所を見ると，脊のすらりと高い細面の立派な人であった。髭を奇麗に剃っている。それでいて，全く男らしい。（三四郎）

(18) 滴の垂れないように乾いた布でしっかりと髪を拭き上げると，背後に人影が動いたような気がした。（華岡青洲の妻）

(19) 丁寧に磨きあげると，古い夢の地肌は積りたての雪のようにまっ白になった。（世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド）

(17) と (17′) を比較してみると (17) の「剃りあげている」は客体の頭にこれ以上剃る部分が残っていないことを表現しているが，(17′) の「剃っている」は剃ることのできる範囲が残っているかどうかは問わない[7]。

2.2.2.「しあがる」

「しあがる」がおわりの局面を表わす場合，「しあげる」同様に「話者の満足感・達成感」（山崎 1995：84），「思うとおりの成功，完成の意味・ニュアンス」（陳 1992：6），「人が仕事や作業をすっかり終了し，その結果，目の前に期待どおりのものが完成していることを示している」（姫野 1999：41）などのムード的な意味を伴うことが指摘されている。

a.〈結果〉の面から終了限界と関わる場合

前項要素が主に生産活動を表わす動詞の「しあがる」は，「しあげる」と同様に終了限界に達したときに生産活動の結果としての完成品が存在する。この場合は連体修飾として使われることが多い。

(20) そのような場合にも，彼らのひとりが一緒に泊り込み，一枚，また一枚と書き上がる私の原稿を，待ちかねるようにして読んでくれた。（一瞬の夏）

(21) 張りあがった状ぶくろを一枚とって，畳の上で横にしたり，縦にしたりしながら，吾一はどこまでも母にくいさがっていた。（路傍の石）

(22) 爺さんは櫂のような大しゃもじを両手に取りあげると，（略）ふっくらと見事に炊きあがった大量の飯をかきまわしにかかった。（楡家の人びと）

b.〈それ以上進まない主体の変化結果状態〉という側面から終了限界と関わる場合

(23) そのうちに雨がきました。（略）しばらくすると雨がやんで，はれあがりました。天も地もさっとあかるくなり，空一杯に大きな虹がかかりました。（ビルマの竪琴）

(24)「兄貴よくきた」と，城吉は禿げあがった額を早くもほてらして，奥の間の囲炉裏のまえで何本目かの徳利を手にとった。（楡家の人びと）

(23)，(24) のように主体の変化を表現する動詞が前項要素になる場合，主体の変化結果の状態がさらに進み，それ以上進むことのできない段階に達するという終了限界を表現している。

2. 2. 3. 「しきる」

渡辺・陳は，「しきる」のもつアスペクト的な意味・用法と動作的な意味・用法を認めつつ，比較的アスペクト性が進んだグループに属していると指摘している（1991：23)。また，使用している用語は異なるものの，石井（1988)，陳（1992)，山崎（1995)，呉（1996)，李（1997)，姫野（1999）なども「しきる」を①終了（完了・完遂など)，②程度（極限，極限状態など）に大別している。一方，杉村は，前項要素となる動詞のアスペクト的な特徴によって分析を進めながらも，「しきる」自体はアスペクト的な表現ではなく，「当該の事態が100パーセント達成すること（裏を返せば残余がゼロになること）を表す表現である」(2008：72）と述べている。

本稿では「しきる」が何らかのアスペクト的な意味を持つ形式であると仮定して分析を進めた。前項要素となる動詞の種類によって〈終点への到達〉，〈動作の完遂〉，〈それ以上進まない変化〉，〈程度の強調〉という４つのあり方で終了限界と関わっていることがわかった。

a.〈終点への到達〉という側面から終了限界と関わる場合

内的限界をもたない人の移動動作を表す動詞が前項要素になる場合，移動動作が終点に達するという終了限界達成を表現している。

(25) 方向転換は間に合って，治夫は堀端に向って交叉点を渡り切った。（化石の森）

(25’)「わしは橋を渡る。ぐずぐずしてはおられん。よし，渡ろう」（黒い雨）

(26) 彼女が『自転車の唄』を唄い終えた少しあとで，我々はどうやら崖をのぼりきったらしく，広々とした台地のようなところに出た。（世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド）

(27) 太郎はそのお兄ちゃんに，みっちり，ただで水泳をしこんでもらった。習い始めた年にもう，六百米の湾を泳ぎ切った。日本泳法は早い速度では泳げないが，水の読み方を習える，という。（太郎物語）

(25’）のように移動動詞と組み合わさる「を格」の名詞は移動の場所を表しているが，移動動作が「しきる」の前項要素になると「を格」の名詞は空間的な範囲としてはたらくようになる。その範囲の終点への到達が「しきる」の終了限界となる。

b.〈動作の完遂〉という側面から終了限界と関わる場合

主体動作を表わす動詞が前項要素になる場合，前項要素にさしだされる動作が完全に行われることを表している。

(28) だが，何を書けばよいのか。書きたいこと，書くべきことはいくらでもあった。しかし，そのすべてを書き切るためには，一晩あっても時間が足りなさそうだった。（一瞬の夏）

(29)「(略) 成功してあのあたり一帯を買いきって新しい村をつくる」（花埋み）

(30) 私はその日も朝から不安と焦躁とに襲われながら，まだ調べきっていない物理の頁を渋々翻していた。（学生時代）

客体の範囲はコンテクスト内に明示され（〜部），その範囲内で客体の残余がゼロになるというニュアンスをつけ加えている。

c.〈それ以上進まない主体の変化結果状態〉という側面から終了限界と関わる場合

自然現象や物の状態変化などを表わす動詞が「しきる」の前項要素となると，変化結果状態がさらに進み，それ以上先に進めない段階に到達することを表現している。それ以上進めない段階への到達が「しきる」の終了限界達成となる。

(31) 夕陽が，線路の反対側に並んでいる小さなビルディングの群れの中に，落下するような速さで沈んでいく。それが完全に沈み切ると，日は急速に暮れていくようだった。（一瞬の夏）

(32) 夜が明けきると，加藤は室堂の小屋から外へ出た。いい天気だった。山と雪と，彼とそして雪原の上に，立山連峰の黒い影が横たわっていた。太陽の姿は見えなかった。（孤高の人）

(33) 骨の表面は長いあいだ陽光にさらされていたかのように乾ききっており，色褪せて本来の色を失っていた。（世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド）

前項要素になるのは，(31) 〜 (33) の「沈む・明ける・乾く」のように変化の達成にある程度の時間的な長さが必要な動詞である。

d.〈程度の強調〉という側面から終了限界と関わる場合

内的情態を表わす動詞が前項要素になる場合，「しきる」は「内的情態の強まった状態というあらたなしきり」をさしだしている。その強まった程度への到達が終了限界達成となる。

(34)「お願いです，ぎんの一生のお願いです」万年は弱りきった。（花埋み）

(35) 本来なら，どれほど晴れやかにしていても不思議ではない私たちが，箱崎のエアー・ターミナルを出発する時から沈み切っていた。（一瞬の夏）

(36) かれらは，体力的にも精神的にもすっかり疲労しきっていた。（戦艦武蔵）

2. 2. 4.「しつくす」

「しつくす」には，「全部，残りなく，すべて」という意味あいがつきまとい，「何かを尽くすことによってという前提で，その動作・行為の「終了」が実現する」形式であるといわれている（渡辺・陳 1991：22，24）。また，終了というアスペクト的な意味は二次的で，基本は「対象を残りなく全部〜する」という動作であること（陳 1992：11），「あらかじめ想定された対象の数量的な残余が無くなることによって，事態の終結を迎える」（山崎 1995：87）ことなども指摘されている。

用例をみてみると，「しつくす」は前項要素にさしだされる出来事が〈徹底的〉であることを表現している。

a.〈徹底的なはたらきかけ〉という側面から終了限界と関わる場合

前項要素が他動詞で具体的な動作の場合，客体の数量や範囲は限定されていて[8]与えられた数量や範囲すべてに動作が及んで客体がなくなれば，その動作は終了限界へ達する。

(37) 父の手ほどきもあろうが，十歳で『素行往来』一通りを終え，十五歳にはすでに『論語』を読みつくしたという才女であった。（花埋み）

(38) そして小男と二人で，大男が私の小ぢんまりとした趣味の良い２ＬＤＫを破壊しつくしていく様を眺めていた。（世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド）

また，前項要素が抽象的な活動を表わす場合は，はたらきかけの度合いが徹底的でその結果の状態が極みに達することを表現している。

(39)「そんなことはありません。結婚というのは互いに相手の人を知り尽し，意気相投合し，愛し合って行うべきものです。(略)」そこになると吟子は耳が痛い。(花埋み)

2. 2. 5.「しはてる」

「しはてる」の前項要素は基本的に自動詞で，なかでも人の外面的な変化や内的情態の変化，場所や物の長期的な変化を表わす主体変化動詞である。これらの動詞が表す変化に時間の長さは関係なく，時間性から離れていくことで特性へとうつりゆく前の状態まで及んでいることを表現している。前項要素がさしだしている変化結果の状態に〈極限状態〉というあらたなしきりを与え，そこへの到達が「しはてる」にとっての終了限界達成となっている。

a.〈極限状態への到達〉という側面から終了限界と関わる場合

(40) 車が病院の正面玄関前にとまり，やつれはててはいるものの院長先生が怪我もなく戻られたとわかると，ばらばらと大勢の者が馳せ集まって来，幽霊でも出現したかのような…と城吉は思った…大層な騒ぎとなった。(楡家の人びと)

(41) いつまでたっても見出せないと，しまいにはノイローゼ気味になってくるし，たとえ運良く見出したとしても，そんな誤りを犯した自分の軽率さにあきれ果てるのが関の山だ。(若き数学者のアメリカ)

(42) 季節が季節のせいか，池のまわりには，いつものように，散歩する人の姿は見えなかった。どっちを向いても，さびれはてた感じだった。(路傍の石)

「やつれる・あきれる・さびれる」など，前項要素となる動詞の表わす変化はすべて無意志的であり，主体の意志ではその変化を止めることはできない。そのような，主体にとってどうすることもできない状態であることが，山崎（1995：88）で指摘されている「意図しない結果に対する話者の虚無感」というムード的な意味へと影響しているのではないかと考えられる。

2.2.6. まとめ

Ⅱに分類される５形式の終了限界達成のあり方をまとめると表２のようになる。

表２

	前項要素になる動詞の主な特徴	動詞例	終了限界達成のあり方
しあげる	広い意味で生産活動を表す動詞	描く	〈結果〉
	言語活動や認識活動を表す動詞	調べる	〈動作の完遂〉
	主体動作・客体変化を表す動詞	剃る	〈それ以上進まない客体の変化結果状態〉
しあがる	広い意味で生産活動を表す動詞	書く	〈結果〉
	主体の変化を表す動詞	晴れる	〈それ以上進まない主体の変化結果状態〉
しきる	移動動作を表す動詞	渡る	〈終点への到達〉
	主に主体動作動詞	買う	〈動作の完遂〉
	自然現象・物の状態変化を表す動詞	沈む	〈それ以上進まない主体の変化結果状態〉
	内的情態を表す動詞	疲労する	〈程度の強調〉
しつくす	主に主体動作を表す動詞	読む	〈徹底的なはたらきかけ〉
しはてる	人や物，場所の変化を表す動詞	やつれる	〈極限状態への到達〉

3. おわりに

本研究は，アスペクト的な意味「終了」を表現する複合的な動詞を，限界とどのように関わっているのか，という観点から考察した。奥田は「動作の局面とは《限界（しきり）にたいする過程の関係》」であると述べている（1988：33）。奥田の規定にしたがえば，「しおわる」「しおえる」「しやむ」の３形式は，終了限界達成だけでなく，終了の局面も表す形式だといえる。逆にこれら３形式がおわりの局面を表わす動詞であり，残りの５形式は終了限界達成のあり方を表わす動詞というように区別されなくてはならないともいうことができる。もしくは，８形式はすべて終了限界達成を表現する形式であり，そのうちの３形式が局面も表わすことができるともいえるだろう。

考慮すべき点も多々あるが，以下の点は今回分析の観点に入れることができなかった。①アスペクト的な意味とテクスト的機能の関連性。②各形式のムード的な意味とアスペクト的な意味の関わり。③自／他対立のある形式の比較。④慣用句化し

たものの扱い。⑤類義表現の比較検討。研究を進める中で必要であると感じたこれらの点を今後の課題としたい。

参考文献

岩崎修（1988）「局面動詞の性格－局面動詞の役割分担－」『武蔵大学人文学会雑誌』20-1，武蔵大学，81-104

石井正彦（1988）「接辞化の一類型」『方言研究年報』30，広島方言研究所，281-296

呉鐘烈（1993）「アスペクトと局面動詞」『日本語と日本文学』19，筑波大学，12-20

呉美善（1996）「「～きる」とそれに対応する韓国語の表現」『ことば』17，85-101

奥田靖雄（1986）「条件づけを表現するつきそい・あわせ文－その体系性をめぐって－」『教育国語』87，2-19

奥田靖雄（1988）「時間の表現（1）（2）」『教育国語』94，2-17；95，28-41

奥田靖雄（1993）「動詞の終止形（1）（2）（3）」『教育国語』2-9，44-53；2-12，27-42；2-13，34-41

工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクスト－現代日本語の時間の表現－』ひつじ書房

言語学研究会・構文論グループ（1989）「なかどめ－動詞の第二なかどめのばあい－」『ことばの科学』2，11-47

城田俊（1998）『日本語形態論』ひつじ書房

杉村泰（2008）「複合動詞「－切る」の意味について」『言語文化研究叢書』63-79

須田義治（2002）「現代日本語のアスペクチュアリティーの体系について」『日本語と中国語のアスペクト』白帝社，41-65

須田義治（2003）『現代日本語のアスペクト』海山文化研究所

髙橋太郎（1985）『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』国立国語研究所報告82，秀英出版

陳軍（1992）「アスペクト的な意味「終了」を表す局面動詞の一群について」『言文』39，福島大学，11-26

姫野昌子（1999）『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房

宮城信（2004）「連続動作の局面と意味」『つくば日本語研究』9，36-54

山崎恵（1994）「局面動詞に関する一考察－文中での用いられ方の比較を中心に－」『富山国際大学紀要』Vol. 4，109-130

山崎恵（1995）「終了の局面を取り立てる局面動詞について」『日本語の研究と教育窪田富男教授退官記念論文集』専門教育出版，77-91

廖紋淑（2005）「局面動詞「～始める」，「～続ける」，「～終わる／～終える」と内的情態動詞との共起関係についての記述的研究」『ことばの科学』18，63-87

渡辺義夫・陳軍（1991）「動作性からアスペクト性へ－局面動詞の一考察－」『福島大学教育学部論集人文科学部門』50，福島大学，11-26

註

(1) 姫野（1999），渡辺・陳（1991），山崎（1995）など

(2) 須田は，動作の過程を相対的なながさをもつみっつの段階にわけ，段階とは，「動作全体の実現のし方をあらわしているのではなく，動作の過程の，ひとつの段階のとりだしであり，他の段階からの分離を特徴とする」と述べている。(2003：240)。また，城田も「段階相動詞」というカテゴリーを取り出しているが，須田の「段階動詞」とは分類が異なる（城田 1998：143 参照）

(3) 奥田（1993：37-38）では動作の空間的な境界や動作の強度，極端な程度など動詞のもつ限界性のさまざまなタイプについて述べている。

(4) 山崎（1995）では，「しおわる」に前接する動詞として，「動作動詞（若干うごき動詞），変化動詞（漸次的変化），他動詞（若干自動詞），意志動詞（若干無意志動詞）」があげられている。

(5)「(しはじめる・しつづける・しおわるの）段階性をあらわす動詞は，コンテクストのさしだす場面のなかに，それ以外の段階が存在することをほのめかすというコンテクスト的な機能をはたす。この特殊なコンテクストが，段階性をあらわす動詞の使用を要求する」と述べている。(須田 2003：116)

(6) ここでは，「しはじめる」と「しだす」の違いについては考慮しない。

(7)「綺麗に」の解釈によっては髭が残っていない状態である可能性も否定できないが，(24) 同様に「青々と剃っている」で考えると，「剃っている」では剃り残しの有無については言及していないことがわかる。

(8) 山崎（1995）も「しつくす」は「対象を数量的にあらかじめ想定して捉える点に重点」があると述べている。客体が数量や程度の幅をもっていることは，「しつくす」にとって重要な要素であると言える。

（琉球大学留学生センター）

琉球大学留学生センター紀要
留学生教育　第7号，2010

A Study of Compound Verbs with the Aspectual Meaning "End of the Event"

TAMAKI, Ayumi

Keywords: end of the event, terminate, phase, compound verb

Abstract

In this paper I have studied eight compound verbs; ***Shi-owaru, Shi-oeru, Shi-yamu, Shi-agaru, Shi-ageru, Shi-kiru, Shi-tsukusu,*** and ***Shi-hateru.*** These verbs have been analyzed for the reason that they all convey some aspect of an end of the event. I analyzed them from the perspective of termination to discern between the eight verbs.

The results of the analysis show that although all the eight verbs have the common meaning of an end of the event, they can be divided into two groups. (1) ***Shi-owaru, Shi-oeru*** and ***Shi-yamu*** do not only convey the meaning of an end of the event, but also convey the phase of the event. These verbs allude to other phases like ***Shi-hajimeru*** and ***Shi-tsuzukeru.*** (2) ***Shi-agaru, Shi-ageru, Shi-kiru, Shi-tsukusu*** and ***Shi-hateru,*** on the other hand, carry both the notion of an end of the event, and an idea of how the event is terminated. Each of these five compound verbs has several different meanings, depending on the character of the preceding verb component.

(University of the Ryukyus)